様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３２１６

研究課題名（和文）ウラジーミル・ナボコフのアーカイヴ調査―「文学講義」と創作の相関関係を探る試み

研究課題名（英文）The Archive Research of Vladimir nabokov in the quest of interrelationship between creative and pedagogical works

研究代表者
寒河江　光徳（Mitsunori, Sagae）

創価大学・文学部・教授

研究者番号：６０４４０２２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：ニューヨーク公立図書館におけるナボコフ・アーカイヴ調査で活字化されていないロシア文学講義の草稿やロシア語で書かれた文学論の存在を見出すことができた。特に、ロモノーソフ論、ヘラスコフ論、トレディアコフスキー論など。他にもロシア語で書かれた『原初年代記』論、プーシキン論、ドストエフスキー論が存在することがわかった。ナボコフが使用していた日記が『ロリータ』の読解の手がかりになることもわかった。ナボコフが使用していた日記帳は黒い皮のカバーで左上に金の文字で年代が階段状に綴られているが、ハンバート・ハンバートが証拠品第２号として陪審員に回覧した日記帳がそれとまったく同じものであることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文学研究は研究者によるものであり、小説の創作は作家によるものであるという棲み分けがなされていたのに対して、ナボコフは、作家でありながら教育活動に従事することによって、小説を研究する視点を自身の創作の中に導入したと言える。本研究の目的は、作家と研究者の視点をコラボレートすることに目的があり、文学研究のなかに創作者の視点を交えることに最大の意味を見出すことができる。ナボコフの文学講義はすでに出版されているが、文学講義の執筆過程にロシア語で書かれた活字化されていないアーカイヴ原稿も見出すことができた。特にナボコフのロシア文学講義において収められていない18世期のロシア文学者についての草稿も見つけた。

研究成果の概要（英文）：During the Nabokov Archive survey at the Berg Collection of the New York Public Library, I found a numbers draft papers as a base of Lectures on Russian Literature, such as articles on Primary Chronicle (The Tale of Bygone Years) , on Dostoevskii, or Pushkin (these were another versions as included in the lectures on Russian Literature), and such rare articles in Russian on such russian writers in 18th century, as Lomonosov, Heraskov, Trediakovsky, etc. In addition, I also found that the diary that Nabokov used was a clue to the reading of "Lolita". The diary used by Nabokov has a black leather cover, with scription of years in gold letters on the upper left "en espalier", they were the same diaries, which were used by Humbert Humbert and shown as a exbit Number 2 to all the juries at the trial in "Lolita".

研究分野：ロシア文学

キーワード：アーカイヴ研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究者が行う文学研究と作家による文学作品の創作との関係は、基本的には切り離されているものであるが、文学研究の中に創作の視点を取り入れ、あるいは、創作の中に批評の視点を取り入れるなどの試みは、ウラジーミル・ナボコフのように自身の作品に批評家や研究者の視点を取り込んだ作家によってすでになされていた。

ウラジーミル・ナボコフがアメリカ在住時にコーネル大学、ハーヴァード大学、ウェルズリー・カレッジなどで、ロシア文学とヨーロッパ文学についての講義を担当していた。ナボコフは、同時に、英語による執筆活動を行なっていたが、自身が大学で講義をしていたロシア文学、ヨーロッパ文学の作品群と自身が書いた作品との間テクスト的な関係性は全面的には解明されていない。

２．研究の目的

無論、科研費受給の限られた期間に、すべてのアーカイヴを精査し、ナボコフの文学作品との関係性を論証することは困難であるが、アーカイヴの調査とナボコフの作品読解の作業を往復することによって、ナボコフ自身の創作活動と教育活動との相関性について考察することは可能である。学期の合間を利用しての海外在住と図書館に通ってのアーカイヴ調査が主な目的であり、ナボコフのアーカイヴの全体像を把握することから始めなければいけなかった（ニューヨークでの在外研究期間2020.5~2020.8には集約的にアーカイヴ調査が可能であった）。アーカイヴには英語で書かれた資料とロシア語で書かれた資料があるが、ロシア語の資料を閲覧するためには資料を管理するワイリー財団から許可を得なければならなかった。図書館では申請した資料を閲覧し、資料の撮影は認められた。アーカイヴ資料には、ロシア語で書かれた詩の草稿、英語で書かれた作品の草稿、研究者や知人との書簡集、蝶のスケッチやノート、作品のアダプテーションの草稿など、実に様々な資料が存在する。滞在中は、通える限り図書館に通い、資料を複写し、資料の分析や精査は帰国してからの作業となった。

３．研究の方法

基本的な方法、作業としては、ニューヨーク公立図書館のバーグコレクションに所蔵されるウラジーミル・ナボコフのアーカイヴを複写、分析し、『ナボコフの文学講義』、『ナボコフのロシア文学講義』などの執筆のための教育活動とナボコフ自身の創作活動の相関関係を調べ、作品との関連性について調べることにあった。文学講義が執筆され、ナボコフが教壇に立っていたのは、英語時代のことであるので、代表作『アーダ』などの作品に言及される講義で扱った作品への言及を見出すことはできたが、ロシア語作品と文学講義との相関関係についてはまだ解明されていなかった。本研究では、ナボコフがトルストイの『アンナ・カレーニナ』との間テクスト的な関係性をロシア語時代の「密偵」などの作品に見出すことができた。

４．研究成果

本研究はウラジーミル・ナボコフのアーカイヴ調査を行い、創作活動と教育活動の相関関係を探ることが目的であった。ナボコフの教育活動は、『ナボコフの文学講義』、『ナボコフのロシア文学講義』に集約されていると考えられるが、その草案と

なる原稿はニューヨーク公立図書館のバーグコレクションに収めれている。まだ公開されていない文献としては、ロシア文学史関連の『原初年代記』論、プーシキン、ドストエスキー論のロシア語版、ロモノーソフ、トレディアコフスキー、ヘラスコーフなど18世紀の文豪についての覚書も含まれていた。これらの原稿はまだ所在は明らかだが研究がなされていないものも多い。アーカイヴの解読を進めて、ナボコフの作品の読解にどういう新機軸を見出すかということも本テーマの主眼の一つであった。ナボコフが使った日記帳の原本を閲覧したが、黒いなめし革に金の文字で年代が階段上で書かれてあるものにメモが書かれていた。ハンバート・ハンバートの手記として書かれた小説『ロリータ』のなかで証拠品第２号として陪審席（つまり、読者である我々）に回覧される日記帳についての記述と瓜二つのものであった。その日記帳は黒い偽の鞣革でできたカバーであるが、金の文字でen escalier（階段上で）という年号が左上から右下へ刻み込まれていた。ナボコフのアーカイヴには鱗翅類学者としての研究記録も多く含まれる。ナボコフは、シジミチョウの研究者として有名であり、蝶の形態を克明に描いているが、その緻密な態度はジュコフスキーの詩の韻律や脚韻などの構造分析をする際にも見出すことができた。自然科学的な観察を深める態度は、創作の中で詳細な描写に徹する態度にも見出すことができると考えられる。ナボコフの自然科学と人文科学を往来する態度は、研究・創作の相関関係に近いものであることがアーカイヴの調査で確認できた。

研究方法について。ジュリ・クリステヴァが述べたintertexuality を詳述すれば、あらゆるテクストが別の様々なテクストのモザイクとして成立する、さらに、先行するテクストと後続するテクストとの間には友好的であると同時に対立的なアンビヴァレンスを見出すことができる、というものである。アーカイヴで文学講義（広い意味でナボコフが残した文学論を含むものとしてここでは扱う）関連の資料を読み解くと同時にロシア語、英語で書かれた作品においてナボコフが講義の中で言及したテクストとの間テクスト的な関係性を見出すことができた。ナボコフの文学講義が書かれ、あるいは大学で講義がなされた同時期だけでなく、それ以前のロシア語作品にも、文学講義で扱われた作品群との間テクスト性を論証することができると考えられる。

詩と散文のコントラスト

ナボコフはチェーホフの「小犬を連れた奥さん」論の中でこの作品には詩と散文がコントラストとして描かれていることを力説する。例えばグーロフがアンナ・セルゲーヴナとの情事の後に小一時間かけてテーブルに置かれていたスイカを食べるシーン、モスクワに帰り、御者にアンナとの出会いにおける躍動を語ろうとするとあの蝶鮫は臭いですよと全然違う話で遮られてしまう。ナボコフの作品『ロリータ』においては、ハンバートとロリータの情事のあと、母親の死を知ったロリータが泣き明かし続けるシーン、さらに第２部においてはロマンスとは似つかわしくないハンバートの過保護に辟易したロリータが愛想を尽かし敬遠し裏切り行為に出るが、ロリータの不貞を疑い、絶えられない気怠さが最後のクライマックス（ロリータの失踪の後の再会）まで貫き通される。詩と散文のコントラストはナボコフの作品の随所に用いられる。

『アンナ・カレーニナ』においてはアンナとヴロンスキーが出会った際の車掌が列車に轢かれる、あるいは、鉄を叩く男の夢など、作品の最終盤でアンナが鉄道自殺をする予兆が随所に示される。たとえば『ロリータ』においては、シャーロットが車で轢かれる前に、車を見ると飛び出してくる犬が何度も登場し、ハンバートの裏切りをしり手紙を投函するために家を飛び出したシャーロットは、飛び出した犬を避けよう

とした車に撥ねられて轢き殺される。ロリータはハンバートと再会した後、母の居場所を問い詰め、母が既に死んでことをハンバートに車中で告げられるが、その前にみたリスの礫死体がその悲劇を耳にする前兆になる。

馬の主題（『アンナ・カレーニナ』）と犬の主題（『ロリータ』）

『アンナ・カレーニナ』においてヴロンスキーが乗っていた馬が倒れていく様子を見るのはアンナが崩れ落ちる様子と重なる。『ロリータ』に頻繁に登場する犬について。たとえば「魅惑の狩人」でロリータがロビーで戯れたコッカースパニエルを、後にハンバートを捨てるように、見捨てるシーンがある。のちにロリータと再会したハンバートは、ロリータの飼い犬と共に見送られる。

芝居の主題

『マンスフィールド荘園』論の中で、ナボコフは、芝居の主題について詳述する。マンスフィールドで行われる劇の配役を演じる役者たちは、この小説の中でその芝居の内容に対応した役柄を演じることになる。『ロリータ』においては、ハンバートがロリータを連れ込んだホテルの名前が、クレア・クィルティによる脚本の芝居のタイトルと同じであり、ロリータは自分がディアーナであると思い男を次々と魔法にかけていくが自分がより大きな魔法にかけられるという役を演じる。ハンバートがホテルに連れ込んだロリータが、実はハンバートを仕掛けて罠にはめ騙す訳だが、そのロリータ本人もクィルティの罠に嵌っていたことになる。『マンスフィールド荘園』と同じように、劇の役柄を主人公の人生が模倣する。

寒暖のコントラスト

ヴロンスキーと出会ったアンナがサンクト・ペテルブルグに帰る車中で、ヴロンスキーを忘れようと思いながら読書にのめり込む、車両は、北西に向かっており、風が昇降口から車両に入り込んでくる。車両は前方にあるストーヴによって温かいが、時折入る風のよって冷たさが時に混じり込んでくる。アンナは、読書をするためにペーパーナイフを自分の身に当て冷たさと感じながらヴロンスキーの体温を思い出す。ロシア語時期に書かれた作品『偵察』"Соглядатай"（英語では「目」"The Eye"）においては、主人公とマチルダのやりとりが同じような寒暖のコントラストによって描かれる。家庭教師先にやってくるマチルダは雨が降っても傘をもたずに主人公に入れてもらうのだが、モーススキンコートに手を入れることによって感じる温もりは土砂降りの冷たさとコントラストを作り出している。

比喩の実体化

ナボコフはゴーゴリの『死せる魂』論において指摘する比喩の実体化は、『ロリータ』に用いられる（ちなみに若島正は『荒涼館』論（ディケンズ）における比喩の実体化とすでに関連づけている）。『ロリータ』においてはラムズデールに移り住み際に、マックーの家に住む予定だったが、炎のような業欲がまさしく実体化して家は全焼しハンバートはシャーロットの家に移り住むことになる。作品の中に他にも火事がもう一度起こるが出火原因は明らかにされていない。ただ、作品の随所に用いられる隠喩と換喩の類推によってそれを読み解くことは可能である。まずハンバートの母親はピクニック中に落雷で死んでいる。ハンバートが収容所で読んだ人物年鑑で読んだ

クレア・クィルティの紹介文には「稲妻を愛したレイディ」が作品名として登場する。ハンバートとロリータのやりとりの中でも、「私はあなたの母親じゃない」と述べるシーンがある。夭折したアナベル・リーとの思い出を話すられないハンバー¡ô_/¡ô_トがニンフェットへの憧憬の念を抱きながらラムズデールに越してきたことは確かであるが、情欲の炎が実態化して住む予定だった家の火事に結びつくとすればその出火原因はハンバートの母親が死んだ原因と同じ落雷によるものだと類推することができる。

耳

『アンナ・カレーニナ』の中でアンナがサンクト・ペテルブルグの駅に出迎えている夫の耳を見て驚くシーンがある。理由としては、社交界で踊ったヴロンスキーの耳が視界に飛び込んでおり、その耳と比べて夫の耳を見直している。一方、『ロリータ』ではロリータが失踪し4年の月日が流れた後、お金に苦労し送金をしてもらいたいとの手紙を受け取り、ロリータの家を訪ねるハンバートが、ロリータを見て「新しい耳」と呟くシーンに反映されている。

シャルルとシャーロット

『ボヴァリー夫人』論の中でナボコフはこの作品中もっともロマンティシズムを貫き通したのは、シャルル・ボヴァリーであると述べている。「エンマの中に誘われ、彼がそこに見出したものは、まさにエンマ自身が白日夢の中に探し求めながら、ついに見出すことができなかったものであり、闇魔の個性の中に、虹色に光る美しさ、きらびやかさ、遥かかなたの夢のようなもの、詩、ロマンス。」（『ナボコフの文学講義』）レオンやロドルフに恋い焦がれるエンマに対して、シャルルはエンマが死ぬまで彼女を信じ抜く。それはレオンやロドルフが抱く感情とは対照的なものだ。のちに机の引き出しに隠された恋文の数々を目にしてエンマの不貞に気づくシャルルは、ナボコフの『ロリータ』の中でシャーロットが同じく書斎の引き出しに隠された日記帳に書かれたメモを読んでハンバートの不貞に気づくシーンに投影されている。シャーロットは白人を女中に雇うことを夢見ているという点で鼻持ちならない俗物根性の持ち主で、ハンバートとの情事を邪魔する娘ロリータを憎み、ガールスカウトに入れて遠ざけようとする。この小説の中で、ハンバートはロリータを愛し、ロリータはクィルティに恋い焦がれ、愛情と欺きの駆け引きが繰り広げられるが、作品の中で未亡人としてハンバートを愛し抜いたシャーロットだけは、純粋で無垢にハンバートを愛し、事故で死んでいくという点においてもっとも悲劇的な役回りを演じることになる。ちなみに女性名のシャーロットはチャーリーであり『ボヴァリー夫人』のシャルルと同じであるが性別が違っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 寒河江光徳	４．巻 11
２．論文標題 書評　Б．Аверин．От Толстого до Набоков．Из истории русской литературы　81	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Krug 11	６．最初と最後の頁 81-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寒河江光徳	４．巻 9
２．論文標題 The Bells の翻訳と変奏-バリモントとナボコフの事例を比較する（シンポジアム）	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本ポー学会	６．最初と最後の頁 65－80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寒河江光徳	４．巻 33
２．論文標題 現代表象文化における「涙・笑い」、「死・生」のアンビヴァレンスについて～グロテスク、グロテスク・リアリズムの視点から考察する試み～	５．発行年 2017年
３．雑誌名 東洋哲学研究	６．最初と最後の頁 129-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寒河江　光徳	４．巻 32
２．論文標題 ミメーシスとは何か　ウラジーミル・ナボコフの作品を通して　読みの「再現」と描写による「再現」の意味を考える	５．発行年 2016年
３．雑誌名 東洋哲学研究所	６．最初と最後の頁 P.83-106.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 寒河江光徳	4．巻 9
2．論文標題 『アーダ』におけるロシア文学の諸作品とその間テクスト性についての考察（第1部38章を中心に）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Krug 9	6．最初と最後の頁 P.58-62.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 寒河江光徳	4．巻 8
2．論文標題 ナボコフ学への認知科学の接近について	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Krug (	6．最初と最後の頁 P.27-33.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Сагаэ Мицунори
2．発表標題 Творчество Владимира Набокова
3．学会等名 Сравнительное изучение литератур Японии и России:типология и взаимовлияние（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Сагаэ Мицунори
2．発表標題 Что такое литературоведение?
3．学会等名 Сравнительное изучение литератур. Лекция 1（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 寒河江光徳
２．発表標題 「ウラジーミル・ナボコフの作品における輪廻転生(メテムサイコシス)の 主題について」
３．学会等名 東洋哲学研究所第３部門会
４．発表年 2019年

１．発表者名 寒河江光徳
２．発表標題 「ダイアナの馬」（牧野信一）と『ロリータ』（ウラジーミル・ナボコフ）について
３．学会等名 東洋哲学研究所第32回学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 寒河江光徳
２．発表標題 ミメーシスを用いた「ダイアナの馬」（牧野信一）と『ロリータ』（ウラジーミル・ナボコフ）の比較考察
３．学会等名 日本比較文学会東京例会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mitsunori Sagae
２．発表標題 Бальмонт и Набоков
３．学会等名 ロシア国立科学アカデミー,コンスタンチン・バリモント生誕150周年記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 寒河江光徳
２．発表標題 「ラフマニノフの合唱交響曲「鐘」はどのように生まれたのか――コンスタンチン・バリモントウラジミール・ナボコフの翻訳技法の違いについて考察する」
３．学会等名 日本ポー学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Mitsunori Sagae
２．発表標題 Ｒｏｓｓｉｙａ ｋａｋ ｚｒｉｔｅｌｎｙａｙａ ｐａｍｙａｔｙ: ｐｏｐｙｔｋａ ｐｒｏｃｈｔｅｎｉｙａ ｎｅｓｋｏｌｉｋｈ ｓｔｉｋｈｏｖ Ｖｌａｄｉｍｉｒａ Ｎａｂｏｋｏｖａ
３．学会等名 Vladimir Nabokov And the Fictions of Memory（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計5件

１．著者名 寒河江光徳	４．発行年 2018年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 P.258.
３．書名 文学という名の愉楽　文芸批評理論と文学研究へのアプローチ	

１．著者名 山岡　政紀、伊藤　貴雄、蝶名林　亮	４．発行年 2018年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 280
３．書名 ヒューマニティーズの復興をめざして	

１．著者名 浅山龍一、木下薫、田中亮平、寒河江光徳、他	４．発行年 2018年
２．出版社 創価大学通信教育部	５．総ページ数 54
３．書名 世界文学への招待	

１．著者名 大野久美、寒河江光徳、村上政彦、山中正樹	４．発行年 2018年
２．出版社 創価大学通信教育部	５．総ページ数 71
３．書名 表現文化とは何か	

１．著者名 寒河江光徳	４．発行年 2018年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 257
３．書名 文学という名の愉楽 文芸批評理論と文学研究へのアプローチ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考